

目的：思春期に形成される自己領域を取り上げ、家族間で育つ関係状況を基に、自己領域・他者領域の成り立ちから、領域間の関係状況を考察する。そして思春期の子供を持つ家族員が、相互に変化する様子を探求する。

方法：参加観察法・心理劇法・質問紙法を組み合わせる。今回は心理劇法を中心に。結果を分析・考察するにあたっては、関係学(創始者 松村康平)の立場からかかわり分析を行う。①日常生活に近い「具体性の心理劇」を企画し、参加者に共通な場面を提示し、日常生活に対応する「関係のずれ」の状況を、明らかにする。②日常生活の中で起きる思春期の状況を、類別しそこから仮説を立て、「仮設性の心理劇」を企画し思春期の子供を持つ家族に、共通した特性を探求する。③心理劇法の中の、役割演技法・劇後の演者・観客・監督の感想を基に、思春期の子供を取り巻く家族の変化について探求する。④力動的に変化する思春期の日常生活をひろげて、新しいかかわりの可能性を考えて「予測性の心理劇」を企画する。

結果・考察：1. 思春期とは、子供か親の領域を基盤に、自己の領域を作る過程である。親子関係の一体化状況を経て、親の領域にははいその子自身の領域を作る過程と考えられる。2. 思春期の自己の領域は、家族のかかわりによって、互いの自己領域の接在共存状況をつくる過程と自己と他者の存在・考えを認識する過程の中で、つくられる。3. 自立した親と自立した子の関係は、力動的に変化する可能性がある。